言の波
発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4248
FAX 095(842)4460

日本の福音宣教

カトリック中央協議会
事務局長　前田　万葉
長崎教区司祭

(1) 司教団の動き

NICEまで

第二バチカン公会議（1962年～1965年）と、1981年の教皇ヨハネ・パウロ二世来日を受け、日本司教団は、1984年に『日本の教会の基本方針と優先課題』を発表した。そして、1987年に『開かれた教会をめざして』をテーマに、「第一回福音宣教推進全国会議（NICE1）」を開催した。特に課題となったのが、『信仰と生活の遊離、教会と社会の遊離』であった。最終日に、参加者から提出された『答申』に答えて、司教団は、『ともによろこびをもって生きよう』を発表した。

NICEから20年・メッセージ

それから20年を経て、二つの「全国会議」を振り返り、これからの福音宣教のあり方を探ろうと、三大司教が『NICE振り返り担当司教』になった。各教区や修道会から諸意見を聞き、まとめたメッセージが、『NICE1から20周年―パウロ年と列福式を迎えて―』である。20年の間に、教会にも社会にも大きな変化があった。メッセージは、「日本の教会は多国籍化し、社会は多くの人が心身の重荷に苦しみ、福音に飢え乾いています。現代の荒れ野とも言うべき厳しい社会・家庭環境において人々が悩み、苦しんでいる今、わたしたちは『神であるにもかかわらず兄弟の一人となられたキリストにならい、すべての人に開かれ、すべての人の憩い、力、希望となる信仰共同体を育てるよう努めたい』（「第一回福音宣教推進全国会議参加者一同の宣言」参照）との決意を新たにし、それを未来につないでいきたい。」と述べている。

今後の方向性を探る

そして、今年6月の司教総会に続き、日本の16教区から各司教と司祭代表者各1人、男女修道会代表各2人ずつに集まっていただき、『日本の教会の方向性を確認し、福音宣教の今後を話し合う集い』を開いた。岡田武夫・司教協議会会長は「参加司祭や修道会代表の方々とともに、今後の展望について話し合いたい。社会の人々にどのような奉仕を行うか、自分自身がどのように変わっていくか、そこから生まれた何かを人々に伝えていきたい。」と、呼びかけた。

話し合いの中では、「司祭減少や教区財政がひっ迫する中で、教区・小教区を維持していくことが困難、教会全体が疲れている」。「高齢化や多国籍化をむしろチャンスととらえ、退職した信徒を積極的に教区・小教区に登用したり、多国籍信徒、特にダブル（両親が異なる国籍）の子供たちに教会の将来を託す」。「今はまだ、無理に行動を起こすより、世を照らし温める内なる「火種」を守り温め直すことが大事」。大震災などの体験から、「社会の必要性に応えていくことによって、また、社会の中で最も困難な状況にある人々とかかわることで教会が見直され、活性化されるのではないか」などの意見がだされた。

再び・聴き取り組む姿勢

これは、NICEから20年も経ち、日本教会の宣教の見直しと方向付けをするため、「司教だけでなく、司祭たちの意見を聴きたい」という、司教団の気持ちからだった。この気持ちが参加司祭たちにも通じ、「聴き、取り組もうという司教団の意向を強く感じた。教会の大事なこ

とをみんなで考え、決めて、みんなで責任をもつ。そういう方向付けができれば教会は変わる」と期待する参加司祭たちの声があがった。

この集いを受け、司教団は『今後の対応検討チーム』を設置し、次に『各教区の信徒代表の意見を聴く集い』を開く計画を準備しつつある。また、NICEを基本に据えつつも、これからは10年ごとの見直しが必要であろうとの見通しもつけている。

(2) 司祭が変われば信徒が変わる、教会が変わる

そもそも、今回の「日本の教会の方向性を考える」ということは、「NICEから20年を振り返り、パウロ年、列福式、宣教再開150年などを契機に、「宣教を見直そう」というのが始まりだった。

そこでまた、タイミングよく『司祭年』が設定された。テーマが『キリストの忠実、司祭の忠実』である。「カトリック教会をつぶすためには、神父を金持ちにすればよい」とは、或る著名な人が言った言葉だと聞いた。裏を返せば、「カトリック教会を繁栄させるためには、神父を貧乏にすればよい」ということになる。つまり、神父である司祭の「清貧」こそ、日本の福音化・福音宣教のキーワードになるということなのだ。

188福者の中の4人の司祭の生きざま、パウロの宣教姿勢、聖ビアンネの霊性は、司祭たちに自己変革の良き示唆を与えてくれる。

教区司祭も、「清貧」「貞潔」「従順」の「新しい生活様式＝福音的勧告」(司祭年開催を告示する手紙の18～20ページ参照)を身につければ、信徒が変わり、教会・長崎教区が変わり、日本社会が変わる、しかも福音的に変わる。祈りのうちに。

Q&A

日本と長崎の福音宣教

Q. 日本の社会は半世紀におよぶ長期政権が崩れ、ついに政権交代が実現しました。ところで、こんな劇的なものでなくとも、日本の教会の深層にも、何らかのチェンジのマグマは存在しないのでしょうか。

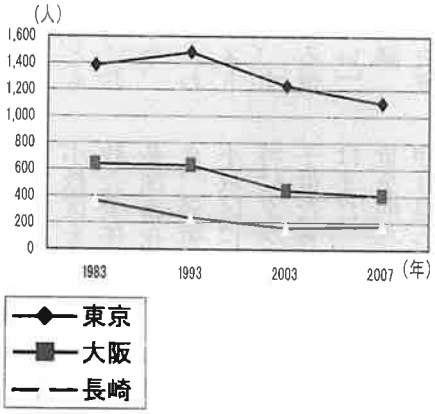
A. 日本という国は戦後六〇年余りを経て、ようやく互いに違うものがぶつかり合って光を見出し、力を養うという政治構造に気付きつつあるようです。

これまでなれ合いで進んできた政治家たちが、本職でぶつかり合ってみがき合う環境が整いつつあるということです。

グチや相手をけなすだけの生産性のないものから、本格的な政策で勝負するようになれば、否が応でも勉強せざるを得なくなるでしょう。

日本の教会にマグマ（かくれたエネルギー）がないかということですが、結構火種となるものはあるのです。よく言われることですが、関門海峡を挟んで東西で日本の教会の信仰体質は全然違うということがあります。

宣教意識ということは、必ずしも数では表せませんが、次のような成人洗礼の数字があります。



年	成人洗礼者数			
	1983	1993	2003	2007
東京	1,385	1,482	1,231	1,099
大阪	640	633	443	405
長崎	368	236	161	173

これらの他の教区の数字を見て「簡単に洗礼を授けるからほとんど残らんと」など

と、背景を探ることもなく切り捨てることがあります。

しかし、この体質の違いは、正面から向き合えば、電気の＋と－のようにスパーク（ぶつかって光を放つ）して、チェンジのエネルギーになり得るものではないでしょうか。生産性のない批判だけではなく、宣教力を競い合えるようになればと思います。

Q．一昨年長崎教区は邦人司教区設立八〇周年を記念しました。一九二七年（昭和二年）日本人司牧者がパリ外国宣教会から司牧を受け継いだわけですが、これは一種の政権交代と言えると思います。八〇年間の長崎教区邦人司牧者の理念とマニフェストはみごとに達成されつつあるのでしょうか。

A．確かに言われてみれば、政権交代とも言うべきものだったと思います。

邦人司教を中心とする司牧者集団による八〇年の司牧の歴史は、前半後半約四〇年間で区切られると思います。

前半は、いわゆる前政権のマニフェストを受け継いだ期間であり、後半は第二バチカン公会議（1962～65）後の四〇年です。

前半はどちらかというと、律法主義と教条主義が前面に出て、掟を守って枠からはみ出していないかどうか、教義がわかっているかどうかが、問われた時代だったといえるでしょう。

公会議後の後半は、守っているか、はみ出さないかというより、生きているか、復活者イエスを自分と社会のど真ん中に証ししているかどうかが、問われていると言えるでしょう

そういう意味で、殉教すなわち「あかし」を今、検証するムードが沸きあがったのだと思います。

一九二六年邦人司教区になる前年の長崎教区の統計によれば、全体の規模は今とそんなに違ってはいません。

違っているのは司祭の数です。当時二十八名の司祭によって、いまとそんなに違わない規模で、教会を司牧していたのです。

それからいまや、三倍増の百名を越える教区司祭数となりました。

この統計から何が見えてくるか、目をそらさないで向かい合えるかどうか、とても興味あるところです。

Q．政治家が変われば国が変わると言われます。失礼ですが「司祭が変われば・・・」というわけにはいかないものでしょうか。

A．第一面に中央協議会の事務局長で、日本の教会を全体的視野で見ておられる、前田万葉神父様が「司祭が変われば信徒が変わる、教会が変わる」という小見出しのもとに、率直な考えを述べておられます。そして「カトリック教会をつぶすためには、神父を金持ちにすればよい」という刺激的発言を引用しておられます。

逆説的ではありますが、現在まだカトリック教会がつぶれていないのは、司祭がそれほど金持ちではないからでしょうか。

ご承知のように奉献生活者（修道者）は、清貧、貞潔、従順の誓願を宣立してわが身を神に捧げます。

ただし、この三つの誓願の目的は、単に誓願を宣立するということにあるのではなく、イエス・キリストの姿をわが身に体現するということに他なりません。

従順を守ったらロボット的人間になり、貞潔を守ったら社会に閉ざされた偏屈な人格になり果てたということでは、本末転倒です。

清貧もキリストの清貧であり、キリストの清貧は、物的にも精神的にも他者を豊かにしていくためのものなのです。

「司祭年」にあたり教区司祭団は、そのテーマである「キリストの忠実、司祭の忠実」をわが身に帯びるべく、懸命に黙想を深めているところです。

さて今、小選挙区制度が発足して、十六年目にしてようやく、二大政党のもと本職でみがき合える形が現実のものとなりつつあります。評議会制度、諸委員会システムなどの形が機能して、聖職者独占主義ではなく、同じ土俵で信徒、聖職者が、カトリックでない方々もまき込んで、本職でしのぎをけずることのできるようになる時期はいつ訪れるのでしょうか。

新しい要理「共に歩む旅」(20)

第十八課「聖母マリア」

[進行係]（参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める）

「二・三人の方が祈りで神さまをこの集いに招いてくださいませんか。」

（誰でも自由な祈りを捧げる）

A．私たちの生活

[進行係]

母親と子どもの間には強い絆があります。子どもは九か月間母親の胎内で栄養をもらって成長します。母親の呼吸で子どもはいのちを保ち、母親の血液によって成長していきます。子どもはほんとうにすばらしい贈り物です。下の写真を見ましょう。

[進行係]（参加者たちに質問する）

①「子どもが母親にしっかり抱かれている姿を見てどう思いますか。」

②「あなたが知っている子どもについて考えてみましょう。ご自分の子どもでも、隣近所のお子さんでもかまいません。その子どもたちは、大きくなっても　親に似ていますね。どんなところが似ていますか。さまざまな点について考えてみてください。」（二組対話で分かち合った後に、全体の集いで発表する）

③「あなたご自身についてはいかがですか。かつてお父さんやお母さんが常々していたようなことを自分もしていませんか。いくつか思い当たる振る舞いなどを挙げてみてください。」（二組対話で分かち合った後に、全体の集いで発表する）

B．神のことば

私たちは、使徒信条を唱えて、神がわたしたちのためにしてくださったすばらしい行いの数々を宣言します。イエスについてはこう宣言します。「父のひとり子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。聖霊によってやどり、おとめマリアから生まれた」と。

それでは、全能の神の子はどのようにしてマリアの胎内で人となられたのでしょうか。それについて語る神のことばに耳を傾けましょう。

[進行係]

「どなたかルカ1・26-38（イエス誕生の予告）を読んでくださいませんか。」

・・・聖書を読む・・・

「ほかの方がもう一度読んでくださいませんか。」

・・・聖書を読む・・・

「次の聖書の箇所を一人ずつ順番に祈るように読んでください ませんか。」

（同じ句を3回繰り返して読む間、他の人は沈黙を守ります）

「おとめの名はマリアといった」（三回）

「おめでとう、恵まれた方」（三回）

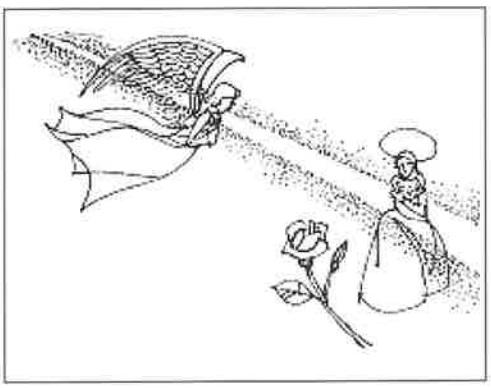
「聖霊があなたに降る」（三回）

「いと高き方の力があなたを包む」（三回）

「生まれる子は聖なる者と呼ばれる」（三回）

「お言葉どおり、この身に成りますように」（三回）

3分間黙って次の絵を見ましょう。



【参考聖書】

＊ルカ　1・39－45
　マリア、エリザベトを訪ねる
＊ルカ　1・46－56
　マリアの賛歌
＊ヨハネ　19・25－27
　イエスと母

C．さらに一歩進んで旅をつづけよう

私たちは信仰の旅路で、きょう、イエスの母マリアに出会いました。マリアは、イエスのご生涯の問いつもそばにおられたように、神への道を歩むわたしたちのそばにいつもいてくださいます。

イエスは、ほかの子どもたちと同じように、九か月間マリアの胎内で成長しました。しかし、イエスには人間の父がいませんでした。イエスは聖霊の力によってマリアに宿られたのです。それで、わたしたちは使徒信条で次のように宣言します。「天地の創造主、全能の父である神を信じます。父のひとり子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます」と。

【進行係】（参加者たちに質問する）

①「わたしたちは、イエスの父が神ご自身であると宣言します。それではイエスはその父に似ているはずです。どのような点が似ているでしょうか。またイエスは母マリアにも似ているはずです。それはどのような点でしょうか。」

②「神に感謝しましょう。神はマリアと、わたしたちすべての者をご自身と強く結び合わせてくださいますから。
　どなたでも、ご自由にお祈りをいたしましょう。」

【進行係の心得】

＊聖母は聖母マリアであると同時に人間のふるさとである母性も意味していると言えるでしょう。「父なる神」に厳しさのみを味わうことしかできない人もいるかもしれません。神の真のすがたへの案内人として聖母マリア信心は必要です。

【覚えましょう】

56．イエスの母はどういうかたですか。

＊神はエバの子孫の中からおとめマリアを選び、御子の母となさいました。恵みに満ちみちたマリアは「あがない」の最もすぐれた実りです。マリアは母の胎に宿った瞬間ら原罪のすべてのけがれを前もって完全にまぬがれ、また、生涯あらゆる自罪（自分で罪を犯すこと）からもまぬがれました。

57．おとめマリアを神の母と呼ぶことができますか。

＊マリアは、受肉した神の永遠の御子、神であるイエスの母ですから、「神の母」と呼ぶことができ、またそのようにお呼びしなければなりません。

58．マリアは終生、おとめでしたか。

＊マリアは御子をやどされた時もおとめとして身ごもり、出産の時も、その後も終生おとめでした。マリアは「主のはしため」（ルカ1・18）としてその生涯を全うされました。

59．おとめマリアは御子のあがないの業に協力しましたか。

＊信仰あつい、従順なおとめマリアは、すすんで御子のあがないの業に協力されました。マリアは全人類に代って「お言葉どおりこの身になりますように」と神の使いに答えました。従順によってマリアは新しいエバ、生ける者の母となりました。

永井隆博士と「神の摂理」の問題

長崎大司教区司祭
山内 清海

理的悪と摂理の関係についての理解は、より複雑であり、困難です。そこには人間の「自由」の問題が絡んでいるからです。まずは、人間の「自由について」、簡単に言及しておかなければなりません。神は人間に、「理性」と「自由意志」を付与されたからこそ、人間は罪を犯すことができ、道徳的悪を行うことができます。換言すれば、神が人間に、この「理性」と「自由意志」をさえ与えていなければ、人間は少なくとも罪を犯したり、道徳的悪を行うことはなかった、とも言えます。

神が、人間に理性と自由意志を与えられたのは、無意識のうちに摂理に従う植物や、本能的に摂理に盲従する動物のようにではなく、人間がより積極的、かつ自主的に、神の意志に従い、神の摂理に快く協力することができるように、と望まれたからです。事実人間は、自分のこの自由意志の決定によって、真に責任ある、人間的行為を行うことになります。しかし問題は、この神の「摂理」と、人間の「自由意志」の関係が、より複雑で難解な問題を提起することになります。

まず明確にしておかなければならないことは、神は人間が、罪を犯し、道徳的悪を行うために、人間に「自由」を与えたのではない、ということです。神が人間に「理性」と「自由意志」を与えたのは、人間を、動・植物のように、必然的、盲目的にご自分のご計画に従わせるためではなく、より自主的、人間的に神のご計画に協力させるためであり、その意味では、これは明らかに、人間への深い尊敬と信頼、そして限りない愛のゆえでした。もちろん神が、人間に、自分の人間的行為について最終的決定能力である自由意志を与えたということは、人間がこの特権を悪用したり、濫用したりする可能性をも予測しておられたことも明白です。その意味で『カテケジス』は、「理性的で自由意志を備えている被造物である天使と人間は、自由に選択し、愛を優先させることによって、究極の目的に向かって進まなければなりません」が、残念ながらわたしたち人間は、「ここで、正道を踏み外すこともありえます」(311番参照)、と指摘しています。しかし歴史的には、「正道を踏み外すことがありえる」どころか、人類の歴史は、この「踏み外し」の連続でした。

人間は、旧約、新約の如何を問わず、常に神との契約の破棄、神の意志に反する裏切りと不忠実な行為を繰り返してきた、と言っても過言ではないからです。

しかし、わたしたちがここでよく留意すべきことは、物理的悪の場合と同じく、神はもちろん、人間が罪を犯し、道徳的悪を行うことを望んではおられませんが、しかしこの悪から何かの善を引き出すことを期待しておられます。神は、ご自分がせっかく人間に与えた自由意志を、人間がこれを濫用し、罪を犯し、ご自分の意志に反するような行動を行うことを望まれるはずはありません。しかし、たとえ人間が、神から与えられた自由意志をもって、ご自分の摂理に反する行為を繰り返し、罪を重ねたとしても、一度人間に与えたこの貴重な自由意志を奪い去るようなことはしません。神は人間に、この「理性」と「自由意志」を与えられたそのときから、人間がこの特権を悪用したり、濫用したりする可能性を知っておられたはずですし、その意味で神は、この能力の乱用や悪用の可能性を容認していたと言うべきでしょう。たとえば上京し

B 倫理的（道徳的）悪と摂理

「倫理的悪」、あるいは「道徳的悪」も、「倫理的に守るべき道を踏み外しているという意味では、明らかに「本質的善の欠如」であり、「形而上的悪」に由来します。しかしこの倫

て勉強しているわが子に、親は、自分たちの生活費を節約して送金します。それはわが子が、不自由なく勉強に励むことができるように願っているからです。しかし、親からの貴重な送金を受けた子どもは、親の意に反して、そのお金を悪用し、乱用して、身を持ち崩すこともありえます。しかし両親は、一度送金したお金を、子供がどのように使用するかまでは、詳細には監視しません。そこには、親がわが子に対する深い愛情と信頼があるからです。親を裏切り続けていた子供たちが、自分が同じ親の立場になったとき、はじめて親の恩を知るようになり、自分の過去を後悔し、親に感謝し、真面目に生活をするようになることもしばしばあります。わたしたちは、この点について無数の実例を挙げることができます。

たとえばダヴィデ王は、一生涯、かつて自分が犯した罪を悔み続け、「神よ、わたしを憐れんでください、御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。・・・・」（詩51・3-71参照）という、今日でも教会によって典礼的に使用されている不朽の祈りを残すことができました。もちろんわたしは、罪を犯すことを肯定するためにこのように言っているのではありません。わたしはただ、たとえ罪を犯すことがあっても、神の助けによって、より偉大な教えを学び、より高度な生活を実践できるようになりえる、と強調したいだけです。旧約聖書に読まれるヨセフの物語もそのよき実例です。ヨセフは、妬みと怒りに燃えた他の兄弟たちによって、商人たちに売り飛ばされ、エジプトの地に連れて行かれます。しかしヨセフは、このエジプトの地で、ファラオ王に認められ、優遇され、ついには、王の大切な側近者の一人となり、エジプトの財産を管理するまでに出世します。やがてこの地方一帯に大飢饉が起こりましたが、エジプトだけは、ヨセフの聡明な判断によって飢饉から救われ、隣国の人々は皆、エジプトに食物を買うために集まります。その中に、かつてヨセフを商人たちに売ったかれの兄弟たちがいました。兄弟たちへの懐かしさと愛に耐えかねていたヨセフは、ついに、自分が兄たちから売られた弟であることを明かします。兄弟たちは狼狽し、恐怖の念にかられます。かれらはきっと、弟に殺されても仕方ない、と覚悟していたでしょう。しかしそのとき、ヨセフは兄たちに、「命を救うために、神がわたしを、あなたたちより先にお遣わしになったのです」と、神は摂理によって、ヨセフだけではなく、父や兄弟、そして一族までも救うために計画されていたことを知らせ、かれらをやさしく悟しています（『創』37章-45章参照）。

同じ神の摂理的な働きを、自他共に、「教会の大迫害者」だった、と認める使徒パウロの偉大な生涯にも見ることができます。かれは自らの過去について、「わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました」（ガラテヤ2・13）と公言してはばかりませんが、かれがキリストに出会ったのは、キリストの「弟子たちを迫害し、殺そうと意気込んで、大祭司の所に行き、ダマスコの教会宛ての手紙」をもって、キリスト者であれば、男女の差なく、エルサレムに連行するために向かっている途中での出来事でした。そしてパウロは、アナニアを介して、キリストの弟子として召されます。かれは「異邦人や王たち、またイスラエルの子らのために」、イエスの名を伝えるために選ばれた「器」と呼ばれます（使9・15-16参照）。ついにパウロはかれの生涯の終わりには、「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのはもはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」（右同2・19-20）と公言することができました。このような波乱万丈なサウロの生涯も、神の摂理を抜きにしては語れません。

はがき「如己愛人」から転載

大司教談話室 ⑩

主日のミサ参加

Q. 今、主日にミサにあずかる人が激減しています。日曜日だけは教会に行けないという社会環境もあります。若者も相変わらず教会に近づきません。なぜだと思われますか？

A. 熱心な信者も少なくないとはいえ、主日に限らず、一般に教会から遠ざかる信者が増えているのは、長崎だけではなく、地域差はあっても、日本、ヨーロッパ、北米などでもほぼ同じだと言えます。その理由について、わたしなりの見解を述べたいと思います。

(1) 信仰生活の根拠や動機づけに問題があるのではないか。長い潜伏を経た長崎の信者は強い信仰を培ってきた。しかし、今、そのあり方を根本から見直す必要に迫られている。家庭での朝晩の祈りはどうだろうか。祈りはするが、しばしば「義務」として唱えていないだろうか。祈りは神との会話である。だから、もし義務感だけで、また祈祷書の祈りを口先で唱えるだけなら、祈る心が育つだろうか。主日のミサも、神のことばを聞き、主キリストの救いの恵みの業にあずかるのだとわかって意識的にあずかるというよりも、あずからなければ「大罪」になるから、あるいは家族も周囲の人も皆参加するから仕方なしに参加するとするなら、ほんとうに参加したと言えるだろうか。朝晩の祈りを唱えること、主日や守るべき祭日にゆるしの秘跡とミサにあずかること、年の黙想会に参加することなどを大切にしていても、「義務である」、「怠れば罪になる」ということだけが意識されているとすれば、ほんとうの信仰は育ちにくい。ほとんどの信者にとって、堅信を受けると、要理全体を学ぶ機会は少ない。また、信者の信仰教育以前に人間としての教育と成長のことがなおざりにされたかもしれない。最も重要なことは、信仰が生活に意味を与え、それを生かしているかどうかという問題である。キリストの教えを深く学び、祈りをし、ミサに参加して聖体をいただくことが、主キリストのように生きること、つまり正しい行いと愛することにつながらなければならない。わたしたちは、今生きておられるキリストとその教えを信じ、実践して、信仰を証しするようさらに努力する必要がある。そのためにこそ日々心をこめて祈り、ミサを生活の中心に置き、要理を学び、聖書に親しむのである。

(2) 信仰生活が、物質的な豊かさ、科学技術の驚異的な向上と、それがもたらした便利な生活、相対主義（絶対的な基準ではなく、自分の判断や好みや状況に応じて良し悪しを決める）などから徐々にそして強い影響を受けている。否、価値観が逆転しつつある。いつの頃からか〝けいこ〟より塾やスポーツを重視する親たちが増えてきた。塾に通うことでいい学歴といい企業への就職が保証され、生活が豊かになって幸せになるということだろうか。しかし、永遠のいのちは、死んだ後のことだけではなく、すでにこの世から始まっていることということを理解し、神への信仰に基づく愛の実践こそ人間にとって最も重要なことであると認識し、その上で信仰と社会生活との両立を模索する必要がある。

(3) 司牧者と信者の関係は重要である。司牧者の言葉や態度に傷つけられたり不満を持ったりする信者が教会から遠ざかることもあり得る。司牧者は、地獄や罪の重大さについてはっきり話す必要はあるが、〝脅す〟ような教え方は慎むべきである。信者たちが喜んで信仰生活ができるように動機づけを大切にすべきである。また信者の気持ちを汲み取るように耳を傾け、賢明で細やかな配慮を心がけ、何よりも一人ひとりに対する深い尊敬と暖かな愛を示すことが求められる。信者も彼らに信仰と愛をもって尊敬と従順を示し、神の国と福音宣教のために協力し、共に一致と交わりへと向うべきである。

（高見三明）

神父様 祝福をください！

東経10～20度・北緯30～40度のほぼ中ほどにあって、地中海に浮かぶカトリックの国マルタ共和国で体験した忘れることのできない、そして思い出すたびごとに私の心を温める想い出を、読者の皆さんと分かち合いたいと思います。

マルタ島を訪問するきっかけを恵まれたのは、たまたま私がローマで開かれていたコンベンツアル聖フランシスコ会の総会議に日本を代表して参加していた会期中に、数日間の休みがあったので、同席していたマルタの管区長アルフォンソ・サムット師から、マルタ島への兄弟的な招待を受けたことに始まります。その霊的印象は魂に余りにも強く刻みつけられましたので、今日でも約半世紀後の想い出がよみがえるごとに、いつも神に感謝しています。

夢にしたこともないマルタ訪問の招待を受けた私は、うれしいながらも、ビザを持たない複雑な思いの中で、訪問は無理だろうと一応辞退しましたが、アルフォンソ師は“いやいや、全然問題はないから・・・”との言葉に信頼し、身支度を済ませ、ローマの空港を飛び立ちました。カトリックの国ですから、修道服に身を包みながら。飛び立った飛行機は瞬く間に地中海を超え、シチリア島の上を飛んで、マルタの空港に着きました。

ところが案の定“待った”が掛かりました。しかし、アルフォンソ師と係官との数分間の話の結果は、「滞在中に手続きをしてください」で難問を無事解決することができました。“あ！カトリックの国だからできたのだ”と自分なりに神に、そして皆さんに感謝しながら、入国したことを思い起こします。

バレッタ市には市民の夕涼みの場としての広い公園があり、その外周には適当に長椅子が設置され、そして傘を開いたような松の木に似た、ローマ市に通じるアッピア街道でもよく目にしたほぼ等間隔の植込みが見られました。

夕日が西の空に傾き、夕焼けとなって沈みかけていたころ、マルタ管区の一人の神学生が私をその広場に案内してくれました。公園の周囲には、椅子に腰を下ろし、夕涼みを楽しむ家族ずれの市民の皆さんがまばらにいました。公園の広さは150×80メートル四方ほどある広さで、全体的に東側の方へ少し傾斜し、立派なタイルが敷き詰められていました。私たち二人は東側の方を散歩していました。すると一人の少女が夕日を背にしながら私たちのところへ走って来ました。何かを話しかけています。少女が何を願っているかを神学生に尋ねてみると、彼は、“神父様、祝福して下さいと願っています”と言うので、少女を祝福しました。すると彼女は、私の腰に付けていたフランシスコ会のロザリオの十字架を手にし、しばらくじっとキリストの姿を見つめていたが、それに恭しく口づけして、にこにこしながら母親のところへ喜んで走って立ち去りました。

この少女が立ち去った後、私を案内する神学生から、少女の先ほどの仕草についての説明を聞いたとき、私は愕然としました。

“神父様、今先ほどの少女が願った祝福は、実は私も子どもだったころ、母親によく言われました。スータン姿の神父様が近くを歩いておられると、「ほら、イエズス様が歩いておられるよ、行って祝福を貰って来なさい」と”。この言葉を耳にしたとき、私は、この国のカトリック信者の板に付いた生活の一端を、垣間見た思いに浸り、さすがに全島カトリックの国だ、と感動した次第です。

帰国した暁には、是非このような光景を実現したいと思いましたが、現実は実に厳しく、玉手箱を開いた浦島太郎の思いのこの頃です。

そして想像の域を超えませんが、きっとあの神学生は、神父様となって、神の祝福を祈り求める者に与え続けておられることでしょう！

コンベンツアル聖フランシスコ会
司祭　末吉　矢作

神学校紹介

長崎コレジオ

長崎コレジオは「教区司祭志願者が、自分の召命を見極め、今日の日本社会の中で福音をのべ伝えるために必要な、人間的、霊的、知的、宣教司牧養成を受けて、司祭職を準備する大神学校での養成に備える」場として設立されました。

長崎大司教区故島本要大司教は、1998年4月1日「長崎コレジオ」の開学を宣言し、引き続き4月12日、復活の祭日にカトリック長崎大司教館で開校式が行われました。

初代院長として溝部脩神父（現在・高松教区司教）が任命され、2代目院長として中島健二師着任。現在は3代目院長となります。

設立当時、長崎コレジオとして使用される建物は、大浦天主堂横にある旧長崎大司教館でしたが、開校が急であったために準備が間に合わず、後期から使用することとなりました。最も多い時期にはコレジオ在籍者が21名を数えることもあったために、旧大司教館の最上階の倉庫として使用していたところを、簡単な間仕切りで勉強部屋と寝室として、使用したこともありました。また、洗濯干し場や風呂トイレなどが足りなかったことから、増築を繰り返していき現在に至っています。

コレジオ生としては、
1998年
一期生として
2人が入学。
2008年
2月
司祭叙階・
野濱達也師
1999年には
6人が入学、
2009年
2月
司祭叙階・
岩下裕志師、
助祭叙階・
中尾直通助祭

2000年には1人、（大神学院在学・1人）
2001年には11人、（大神学院在学・1人）
2002年には5人、
2003年には9人、（大神学院在学・1人）
2004年には3人、（大神学院在学・1人）
2005年には2人、（大神学院在学・2人）
2006年には2人、（コレジオ在学・2人）
2007年には3人、（コレジオ在学・2人）
3008年には0人、
2009年には3人（コレジオ在学・3人）
の入学者がありました。

長崎コレジオは設立されてから今年2009年までに記録上47人が入学したことになり、この間、2人の司祭と1人の助祭を輩出しています。

現在は7名のコレジオ生が司祭職を目指してコレジオで共同生活を送っています。

基本的には、朝5時50分の朝課に始まり、念祷、ミサを共同で行い、ミサ後朝食を取った後は各自大学に通います。現在通っている大学はシーボルト大学、純心大学、総合科学大学で、午後6時30分の夕食までに帰院することになっています。夜は8時30分からコレジオ聖堂や大浦天主堂でロザリオや十字架の道行、それに晩課を行います。

その他、黙想会、月の静修、ゆるしの秘跡、講話、みことばの分かち合いなどを定期的に行っています。

また、これらの日常生活に加えて、長崎コレジオ設立後間もなく、学生に国際的視野を身につけさせるために、**「ソロモン友の会」**後援会が創設されました。「ソロモン友の会」はカトリック信者であるなしにかかわらず、広く一般の若者に開かれていますが、同時に、長崎教区の神学生養成の重要な一環としての役割を果たしています。これからの神学生養成には世界（少なくともアジア）に目を向けた国際的な視野が不可欠です。小神学校と大神学校の中間にあたる長崎コレジオでは「ソロモン友の会」を通して、神学生をソロモンやタイなどの国に派遣し、彼らが自分の司祭召命を見つめ、育む機会としています。

髙見大司教様をはじめ、長崎教区の神父様方、また多くの信徒の方々の力強いご支援を頂いています。現在、新入生以外のコレジオ生やコレジオ卒業生は全員この「ソロモン友の会」の支援により、海外でのボランティア活動に参加した経験を持っています。

（院長　山脇　守）

長崎カトリック神学院

１８６５年、潜伏キリシタンとの出会いを果たしたパリ外国宣教会のベルナール・プチジャン神父は、直ちに邦人司祭の養成に着手しました。その年の12月８日無原罪の聖母の祝日の８日間中に司祭館の屋根裏部屋で始まった神学生教育でしたが、１８７５年にはド・ロ神父によって羅典神学校が完成。以来、時代とともに幾度かの移転を経て１９８９年現在地に新校舎が建てられ、名称も「長崎公教神学校」から「長崎カトリック神学院」に改められました。無原罪の聖母を守護の聖人と仰ぎ、今年創立１４４年を迎えます。

時代も場所も変わりましたが、神学院の存在目的はただ一つ。司祭の養成です。長崎カトリック神学院は小神学院とも言われ、中学一年生から高校三年生までの小神学生が共同生活を送りながら司祭職を目指します。幼いながらも志した神さまへの奉仕を実現すべく、喜怒哀楽を共にしながら真剣に取り組んでいます。同じ目標を持っている共同体だからです。卒業後は次のステップの長崎コレジオへと進みます。

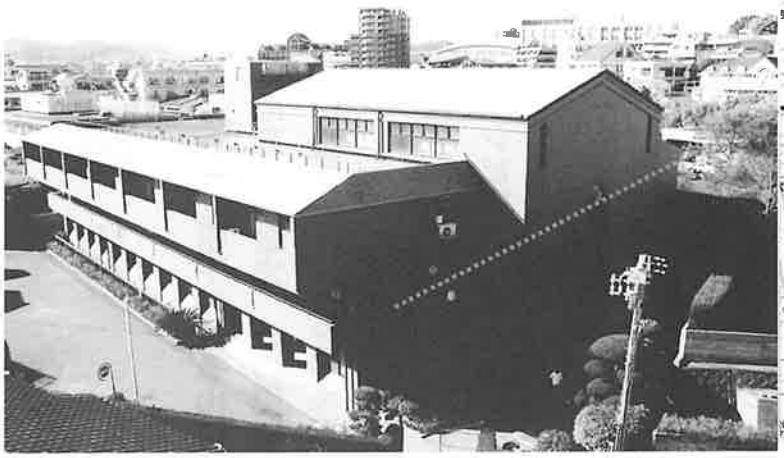
小学校卒業の時点で将来を選択するのは早すぎると思われるかもしれません。しかし、本人に「憧れ」があるようでしたら、チャンスを与えていただきたいと思います。長崎教区の場合、小神学院体験者以外の司祭召命が非常に少ないこと、また司祭職は個人の職業の選択というよりも神さまの任命であること、少年期に共同生活を体験できること、などが理由です。また、小神学生は南山中学校・高等学校に通学して学習指導を受けますので、同世代の学生と話題や生活が離れてしまうことはありません。自分自身で考え、行動しながら少年は青年へと成長していきます。なお、長崎カトリック神学院は中学一年からだけでなく、途中の学年からでも入学することができます。

一時期は小神学生数が１００人を超える時代もありましたが、年々少なくなってきており、現在長崎教区小神学生は12名です。神学院は霊的にも経済的にも、多くの皆さまの善意に支えられています。それは司祭が必要とされている何よりの証拠です。どうぞ、各小教区で「召命を求める祈り」で支えてくださるようお願いしますと共に、これはと思う子どもたちに呼びかけ、送り出してくださるようお願いします。

2009年　海水浴の時に

以上、長崎カトリック神学院「入学のご案内」のパンフレットの内容をもとに紹介しました。

院長
山田　良秋



生活の中の教会

跡次教会　　フォトプラン 山本 富夫

跡次

青方湾を眼下にする山の中腹に立つ教会堂。その麗姿は山の緑と海の青に映えている。

信仰の始まりは一八七九年、シビ網漁夫の入居によるという。

一九一四年、小学校舎の半分を購入し、最初の教会堂を建立。その後、老朽化。一九三二年には新堂を献堂した。

五十余年後の一九八四年、現在地に海の星のマリア教会堂を建立。

海の青を見下ろす教会堂は、眼下の人々とともに、石油備蓄基地、無人となった折島をも見守っている。